

教 育 長 様

<table border="1" style="width: 100%; border-collapse: collapse;"> <tr><td style="padding: 2px;">研究コース</td></tr> <tr><td style="padding: 2px;">グループ研究Bコース</td></tr> <tr><td style="padding: 2px;">校園コード（代表者校園の市費コード）</td></tr> <tr><td style="padding: 2px; text-align: center;">561155</td></tr> </table>	研究コース	グループ研究Bコース	校園コード（代表者校園の市費コード）	561155	<table border="0" style="width: 100%; border-collapse: collapse;"> <tr> <td style="width: 33%;">代表者</td> <td style="width: 33%;">校園名 :</td> <td style="width: 33%;">大阪市立本田小学校</td> </tr> <tr> <td>校園長名 :</td> <td colspan="2" style="text-align: center;">錢本 三千宏</td> </tr> <tr> <td>電 話 :</td> <td>06-6851-1531</td> <td>F A X : 06-6851-3194</td> </tr> <tr> <td>事務職員名 :</td> <td colspan="2" style="text-align: center;">喜連 尋滋</td> </tr> <tr> <td>申請者</td> <td>校園名 :</td> <td>大阪市立成育小学校</td> </tr> <tr> <td></td> <td>職名・名前 :</td> <td style="text-align: center;">主務教諭 大林 正法</td> </tr> <tr> <td></td> <td>電 話 :</td> <td>06-6932-0061 F A X : 06-6932-6360</td> </tr> </table>	代表者	校園名 :	大阪市立本田小学校	校園長名 :	錢本 三千宏		電 話 :	06-6851-1531	F A X : 06-6851-3194	事務職員名 :	喜連 尋滋		申請者	校園名 :	大阪市立成育小学校		職名・名前 :	主務教諭 大林 正法		電 話 :	06-6932-0061 F A X : 06-6932-6360
	研究コース																									
	グループ研究Bコース																									
	校園コード（代表者校園の市費コード）																									
561155																										
代表者	校園名 :	大阪市立本田小学校																								
校園長名 :	錢本 三千宏																									
電 話 :	06-6851-1531	F A X : 06-6851-3194																								
事務職員名 :	喜連 尋滋																									
申請者	校園名 :	大阪市立成育小学校																								
	職名・名前 :	主務教諭 大林 正法																								
	電 話 :	06-6932-0061 F A X : 06-6932-6360																								

校印

平成31年度 「がんばる先生支援」研究支援 申請書

◇本研究の支援を受けたく、次のとおり申請します。

1	研究コース	コース名	グループ研究Bコース	研究年数	新規研究（1年目）
2	研究テーマ	算数科と社会科との融合授業 —データの活用を通した深い学びの追究—			
3	研究目的	<p>テーマに合致した目的を端的に記載してください。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・新学指導要領が出され、算数科においては新領域「データの活用」が新設された。設定理由として「身の回りの事象をデータから捉え、問題解決に生かす力、データを多面的に把握し、事象を批判的に考察する力の育成を目指す」ことが述べられている。これは社会科で、授業のはじめに資料を読み取り問題解決していく場面で必要とされ、算数科で身に着けた力がそのまま要求される。したがって、算数科と社会科をデータの活用という観点で融合させていくことは、今日的課題として研究目的にするべきことと捉える。膨大なデータから児童が主体的対話的にデータのもつ特徴や傾向を把握し、情報を整理し、選択する過程を通して、問題に対して自分なりの結論を出したり、その結論の妥当性について批判的に考察する深い学びを明らかにする。 			
4	研究内容	<p>継続研究は、前年度の成果と課題を分析した内容を踏まえて記載してください。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・算数科及び社会科の日々の授業を動画や画像の学習記録を基にして、主題に沿って分析していく。授業の映像を見ながら、部員で必要なデータの活用能力とは何かを考えていく。話し合いの場面設定や自力解決する時間について考察する。 ・児童が日々の学習において、どのような交流活動をしていくのかについて考察する。三校（成育小、本田小、松之宮小）の学校の全国学力・学習状況調査算数科の問題の達成状況を見比べて、自校以外でも活用できる主体的・対話的で深い学びのある学習を提供できるようなプランを考える。 ・「データの活用」は新学習指導要領で新たに入ってきた領域だけに、多くの教員にとって未知な部分も多い。そこで、授業を通して、児童が主体的対話的にデータのもつ特徴や傾向を把握し、情報を整理し、選択する過程を通して、問題に対して自分なりの結論を出したり、その結論の妥当性について批判的に考察する場面を提示することで、具体例を示して伝えていく。 ・児童がもつ誤概念は、思い込みで認識していることに起因している場合がしばしばみられる。例えば、社会科の学習で、米の消費量は昔に比べて増えているか、減っているかを考える場合、人口が増えているから、消費量も増えていると思っている児童が多い。しかし、資料で調べてみると、減っていることに気づき、そこからその原因を知りたくなり追究し始める。こういった深い学びを児童が主体的対話的に取り組んでいくための教材開発を行っていく。 ・統計はグラフの一目盛りの値を変えるだけで、こんなに増えたのか。あるいは減ったのかと思わせることもできるようにも用いられる。結果をそのまま捉えるのではなく、批判的に読み取る態度を養い、友達同士の議論を通して、論拠立てて結論を出せる論理的思考のできる指導法を提供する。 			

5	活動計画	<p>5月 第1回グループ内研修、年間研究計画策定 6月 第2回グループ内研修・指導案検討会 7月 第3回グループ内研修・指導案検討会・筑波大学附属小学校授業参参加 8月 第4回グループ内研修・指導案検討会・筑波大学附属小学校授業参加・日数教発表 9月 第5回グループ内研修・指導案検討会 10月 第6回グループ内研修・指導案検討会・新算研松本大会参加 11月 第7回グループ内研修・指導案検討会・全市公開研究授業（研究内容の中間発表） 12月 第8回グループ内研修・研究授業まとめの検討会・新算研湯河原セミナー参加 1月 第9回グループ内研修・大阪市経年調査による検証、結果分析 2月 第10回グループ内研修・筑波大学附属小学校授業参観・「がんばる先生支援」研究の報告</p>				
6	見込まれる成果とその検証方法	<p>大阪市教育振興基本計画に示されている、子どもの心豊かに力強く生き抜き未来を切り開く力の向上および教員の資質や指導力の向上について、見込まれる成果を端的に記載し、その成果について、客観的な指標により必ず数値で示すことができる検証方法を記載してください。</p> <p>【児童】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・児童一人一人がよく考えて問題解決に向かい、クリティカルシンキングの視点を活用し、授業に参画するようになる。 ・当該児童の大阪市作成の経年調査や全国学力調査のデータの活用に関する問題の正答割合が高くなる。 ・日常的な算数科や社会科学習においてデータを批判的に見る視点が入り、児童同士の対話、担任の指導観が表れたノートになる。 <p>【教員】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・仮説に対する講評を参加者とともに受け、本件の研究の成果の根拠を明らかにする。 ・新しい深い学びのあり方の有効性について検証することができる。 ・新学習指導要領に沿う、本研究における算数科及び社会科の授業に関する学習規律や学習を行う上での獲得させたい力が明確になる。 ・研究会に参加した教員や研究発表会に参加した教員に「算数科と社会科の学習をデータの活用を通して融合する」という視点を見つめてもらうきっかけをつくる。 <p>【児童】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・大阪市経年調査の算数科と社会科の対前年比10%向上。次年度の全国学力調査の算数科のB問題の正答割合を全国平均よりも5%向上させる。 ・日々の学習の中で児童全員（100%）のノートが、自分の考えと他者の考えが分けて表れるようになる。 ・日々の学習の中で児童全員（100%）が自分の言葉で他者に思いを伝えることができている。 ・思い込みで認識していたことを資料を基して認思考することで、認識が変わり、資料を基にした思考する意義を知る。 <p>【教員】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・検討会にて、参加者によるアンケートを行う。アンケートの形式は、ICTモデル授業の「教育センターの調査用紙」を使用する。 ・指導講評に関するアンケートを行い、参観者の本研究に関する感想を集め、考察する。 ・他校教師とのICTコンテンツを活用した授業討議会を行う。 				
8	研究成果の共有方法	<p>○研究発表の日程・場所（予定）</p> <table border="1" data-bbox="393 1663 1453 1724"> <tr> <td>日程</td> <td>令和元年10月21日</td> <td>場所</td> <td>大阪市立成育小学校</td> </tr> </table> <p>◆代表校園HPでの共有【必須】</p> <p>他の共有方法を計画している場合は記載してください。</p>	日程	令和元年10月21日	場所	大阪市立成育小学校
日程	令和元年10月21日	場所	大阪市立成育小学校			
9	代表校園長のコメント	<p>2016年12月21日の中央教育審議会答申で算数・数学の学習活動モデルが示され、算数・数学の問題発見・解決の過程を「日常生活や社会の事象を数理的に捉え、数学的に処理し、問題を解決することができる（現実の世界）」と「数学の事象について総合的・発展的に考え、問題を解決することができる（数学の世界）」の2つの世界で説明している。本研究は、前者の「現実の世界」での問題発見・解決と社会科のデータの活用の融合により、リアリティーのある学びを追及しようとしている。算数科の「データの活用」は「目的に応じてデータを集めて分類整理し、データの特徴や傾向に着目し、問題を解決するために適切なグラフを選択して判断し、その結論を考察する」思考力・判断力・表現力を育成することにある。社会科におけるデータへのアプローチは異なるが、学習を転移させる研究としては興味深く、期待したい。</p>				